

# 建築家と家を建てる、という決断

—夢ある人達と共に走ってきた その日常を伝えてみたい—

守谷 昌紀

【まえがき】

「建築家などという看板を掲げている当社に連絡をし、さらに会いに来てくださり、本当に有難うございます。それがどれだけ勇気のことか、理解しているつもりです」

初めて相談に訪れた人に、私はこう伝える。

一般的に、「建築家」のイメージとはどのようなものだろうか。

「気難しい」「機能よりデザインを優先する」「高くつく」

悪い側は、このようなのだと想像している。それなら建築家を名乗らなければよいのだが、あわせてこのようなイメージもあるのだと思う。

「自分たちの夢をかなえてくれる」

一級建築士は国家資格だが、建築家という国家資格はない。それは生き方だと考えている。

有資格者として法を順守し、建物の安全、機能に満足する建築を設計する。これが建築士としての役割だが、建築

に求められているのはそれだけではないはずだ。

「建築は、未来の幸せの形」これが私の哲学だ。

全ての仕事は人類の幸せのためにある。幸せは建築のなかだけで生まれるものではないが、一生の70%を建物の中で過ごすと聞いたことがある。建築設計とは、まさに未来の幸せを描くことではないか。

幸せは心で感じるものだから、建物として機能を満たしているからといって幸せを得られるものではない。建築の創造によって、誰かの夢の実現に貢献したい。自分の職能で貢献したい。それが、建築家を名乗る理由だ。

近年、欧米に倣い建築家という資格もできているが、一般にはまだまだ分かり難い存在なのだと思う。

冒頭に書いたとおり、依頼をしてくれる方々は本当に勇気のある人達である。様々な建て方があるなかで、建築家と建てるという選択をし、さらに私達を訪ねてくれる。余程、自分の判断に自信がなければできないことだと思っている。

私達が素晴らしいと言いたいのではない。その決断をできることが素晴らしいのである。

大手、中小のハウスメーカー、建売住宅、地場の工務店と様々な選択肢がある。また「建築家は、建築をつくらな

い」という名(迷)言があるとおり、建築家が居なくても建築はできる(法律上、建築士による設計は必要であつても)。

その中で、建築家と家を作りたいと考える人は、通り一遍の建物では寂しいと思つてゐるのではないか。家族の幸せを本気で考えたとき、一緒に夢を実現してくれるパートナーが必要だと考えたのではないだろうか。

訪れた人達は、紆余曲折があつたと皆一様に口にする。「果たして一生に一回の家が、これで良いのだろうか」と。「それは難しい」「コストが合わない」「我が社の決まりでは対応できない」などという言葉に、一旦は希望を失う。しかし諦めきれず、様々な媒体を使いどうすれば自分達の夢を実現できるか模索する。

そんなとき、不安はあるが建築家なるものに相談してみようか……となる。建築家とは、まるで駆け込み寺の僧侶のようにも見えてくる。もちろん、全てがこのケースではないが。

懸命に働き、家族の幸せを願ひ、大きな夢がある。そんな人達が私のクライアント(依頼主)だ。「家はそこそこで良い」などという人は、一人もいない。そのような、純粋な思いの中で仕事を続けて来たことが私の誇りである。

その真剣勝負の場で鍛えてもらひ、学んだことが本当にたくさんあるのだ。

クライアントはどんなことを不安に感じ、知りたいと思っていたのか。私が21年間にわたって経験した現実をここに綴らせてもらおうと思う。

家族の幸せを本気で願う人達。それを実現したいと思う建築家。この本が、両者を近づけるものになることを心から願っている。